

めぐ
環る

よしの
吉野未佳哉
みかや
川越東高等学校
一年

「朝ごはんだから早く部屋から出てきなさい」

「部屋の前に置いておいてー」

「まったく。ゲームばかりしていないで、学校行きなさい」

最近では毎朝この調子だ。ゴールデンウィーク明けから俺は学校に行っていない。かれこれ一ヶ月前のことだ。何が嫌だったのか今となっては思い出せない。勉強が嫌だったのか、ただ単に学校が面白くなかったのか、一日休んだらもう駄目だった。これからのことを考えると、大学やら就職やらで嫌になる。だから現実逃避のためにゲームをしている。これが今の俺の本音だ。いつもだったら、この後母さんがごはんを置いて、それを食べていたらとしたら一日が始まるどころだ。しかし、きょうの母さんは違った。母さんが階段を上ってきて、また降りる音がした。俺はそっとドアを開けてごはんを取ろうとした。でも、ごはんがない。代わりに紙が一枚落ちていた。「働かざる者食うべからず」と半紙に筆で書かれていた。達筆だなとぼんやり思った。えっ？ どういうことだ？ 俺は久しぶりに部屋を出て階段を駆け下りた。そして台所にいる母さんに、

「こんなこと言われても困る」

「あんなのごはんはもう無いわい」

「はあ？」

「だから、あんなのごはんはもう無いの」

「どういことだよ」

「高一にもなって、学校にも行かずにだらだらして世の中に貢献しない人にごはんを食べる資格はないって言うてんのよ」

「だったら出て行ってやるよ」

「好きにしなさい」

しまったと思いながらももう後へは引けない。俺は階段を駆け上がり、家出するために登山用のリュックサックに何日か分の着替えと財布、貯金通帳、スマートフォンを入れ、階段を駆け下り勢いよく家を飛び出した。自転車にまたがり、とりあえず近くの公園に向かった。公園にはまだ人気が無かったので、ブランコに乗りしばらくの間揺られていた。太陽の光を浴びたのは一ヶ月ぶりだ。この先のことを考えるとお先真っ暗だが、しばらくこの気持ちのいい空間でブランコに揺られるのも悪くない。

耳元で子どもたちの声がする。目を開けるとブランコ待ちの子どもが列をなしていた。いつの間にか眠ってしまったらしい。俺は慌ててブランコから離れて、子どもに

譲った。それから俺はベンチに座りリュックからスマホを取り出し、どこへ行くのか調べてみることにした。自転車で三、四時間のところとなると百キロ圏内かな。ここからだと、前橋、宇都宮、横浜、つくばが検索結果に出てきた。俺は公園の地面に近くにあった枝で字を書いた。すると一人の子どもが寄ってきた。

「ねえ、何を描いているの？」

「場所の名前を書いているんだよ」

「そうなんだ」

「この四つの中でどれが一番？」

「これ」

その子は宇都宮の文字を指さした。

「ありがとう」

とずっとその子は何も言わず母親の元へ走り去って行った。

俺はその子の言うとおり宇都宮に行くことに決めた。特に当てもないがとりえあえず自転車に乗り宇都宮方面へと向かうことにした。スマホの地図を確認しながら、ひたすら走って行く。途中、暑くて汗が噴き出して倒れそうになったので、「コンビニに寄り水を買った。それから、一時間

おきに休みつつ走ったので宇都宮に着いたのは夕方五時になってしまった。そういえば朝ごはんも食べていない。ここまで水しか飲んでいなかったから、空腹で死にそうだな。何か食べなくては。そんなことを思いながら自転車を押し歩いてみると黄色い光を煌々と放つ看板が目に入った。近くまで行ってみると、餃子と書いてある。とりあえずここに入るう。俺は自転車を店の横に置き、入っていった。

「いらっしゃい。好きな席に座って」

「はー」

ととってもカウンターしか空いていない。俺はカウンターの一番端の席に座った。

年季の入ったメニューを見るとなんと餃子しかない。しかも飲み物もごはんもない。あるのは水と餃子だけだ。今更店を出ることも出来ないし、仕方がない。餃子でお腹いっぱいにしてよう。

「すみません。餃子三人前下さい」

「はい」

すると十分もしない内に大皿に盛られた十五個の餃子がどんと目の前に置かれた。しかも一つが大きい。でもお腹が空いているので、箸を止めることなく食べます。

「お兄ちゃん、いい食べっぷりだね」

「はい。お腹が空いていたもんで」

「餃子はおいしいかい？」

「とてもおいしいです」

「この店は餃子しかないだろう。本当は他にも料理を出してもいいんだけど、先祖代々の言い伝えで餃子以外作っちゃいけないことになっているんだよ」

「そうなんですか」

「この先祖代々の謎のルールについてはよくわからないが、餃子がおいしいので細かいことは気にしないでおくことにした。」

「ところで、お兄ちゃん初めてこの店に来たみたいだけど近所に住んでいるのかい？」

「この問いに対してどう返そうか迷ったが、ここは正直に答えることにした。」

「いえ、埼玉から自転車で来ました」

「自転車で？ そりゃえらい時間かかっただろう。一人かご？」

「はこ」

「君を見ていると俺の若い頃を思い出すな。俺が高校を卒

業して本当は自衛隊に入ろうと思っていたんだけど、餃子屋になれて親父に言われて家を飛び出したんだ。三日ぐらいたったかな。友達の家を泊まり歩いて過ごしていたけど、仕方なく諦めて家に戻ったんだよ。君はその時の俺にちよつと似てるな」

「このおじさん俺が家出したってわかったのかな？ 見ず知らずの人だし正直に話すか。」

「実は俺、今朝家を飛び出したんですよ」

「やっぱりそうだったか。今日泊まるところどうするんだ？」

「まだ決まってません。ファミレスとかで過ごそうかなって思ってます」

「まあファミレスでもいいけど、この店の二階が家だから、泊まっていくか？ その代わり親御さんにはこの場所と無事を知らせるならね」

「本当ですか？ それは助かります。いろいろ手伝いますので是非泊まらせて下さい」

「わかった。今連絡しておきなよ」

「あまり気が進まないが、せっかく泊めてくれるというので、おじさんの言うとおりのメールで「今宇都宮、無事」と

だけ連絡を入れた。

「連絡しました」

「じゃあ、早速だけど、皿洗いを手伝ってくれ。実はうちの昨日階段でこけて骨折しちまって、今入院しているから人手が足りなくてちよつと助かるよ」

「そうだったんですか。頑張ります」

厨房に入ると、俺よりちよつと年上の愛想の無い男の人がいた。息子かな？

「よろしくお願いします」

「あー」

やはり愛想が無い。

「ところで、お兄ちゃんなんて名前なんだ？ おじさんは加倉正造かくらしやうぞうっていうんだ。この愛想の無いのは羽衣衣ういし達たち樹き。アルバイトだ。二十歳だからお兄ちゃんよりちよつと上か？」

「俺は杞川響きかわひびき 十七歳です」

「響か。よろしくな。じゃあそのゴム手袋をはめて早速皿洗いからはじめてくれ」

「はこ」

俺は皿を洗いながら厨房を見回した。店の外見から思っ

た通りの狭さだ。この店は先祖代々というだけあって、焦げ跡やシミが天井や壁にあるが、ほこり一つ無く掃除が行き届いている。手を抜いたらすぐバレそうだ。俺は皿の裏まで丁寧に洗い、順調に皿洗いを進めていった。が、次から次へと運ばれてくる皿を洗い終わったのは、結局店が閉まってから三十分後だった。達樹さんは愛想は無いが、仕事は早い。注文を聞き、水と餃子を運ぶ、お会計に至るまでの動きが流れるようだ。

「お疲れさん。二階に上がると廊下の左の突き当たりに風呂があるから、響は風呂に入って、風呂の隣の和室の押し入れから適当に布団出してくるいでいてくれ」

「ありがとうございます」

それから、俺は二階へ上がり、風呂に入り、布団を敷いて寝転がっているとどつと疲れが出て、明日の朝ごはんも餃子なのかなと少し不安になりながらいつの間にか寝てしまった。

急にまぶしくて目を開けると、達樹さんがカーテンを開けているところだった。

「おはよう。今日は朝からバイトに来てるんだ。下で店長が呼んでるぞ」

「おはようございます。今行きます」

眠い目をこすり、洗面所へ向かい顔を洗った。下に降りると厨房でおじさんが仕込みを始めていた。

「響、おはよう。朝ごはんですからそこに座りな」

カウンターに座り待っていると、達樹さんが餃子丼を運んできた。恐れていたことが現実となってしまった。朝から餃子だ。本当にこの店は餃子しかない。まさかお昼も……。というか俺はいつまでここに居てもいいのだろうか。

「加倉さん、俺、いつまで居ても大丈夫ですか？」

「俺の方はうちの帰ってくるまでやってくれると助かるけど、響の方はいいの？ 学校とか家族とか」

「……。なんとか大丈夫だと思います」

「うーん」

おじさんは少し迷ったようだったが、

「じゃあ二週間よろしくな。家には毎日連絡いれるよ」と言ってくれた。

「はい。ありがとうございます。家には毎日必ず連絡します」

「俺にも念のため響の家の電話番号教えてくれ」

「〇四八—〇〇〇—××××です」

「わかった」

「ところで、いつも朝からこんなに忙しいんですか？」

「きょうは定休日なんですが、明日、明後日に餃子フェスティバルがあって、そこで大量に売るからその分仕込まないといけないんだ。だから達樹にも朝から来てもらってる」

「そりゃ、大変ですねえ」

「早速だが響、裏口に置いてある野菜を全部運び入れてくれ」

「はい」

裏口に行ってみると、山のように積まれた段ボール箱があった。中を覗いてみるとみずみずしいキャベツだ。これは重そうだ。一つ一つ慎重に運ぶことにした。それから約三十分かけてすべて厨房に運び入れた。

「終わりました」

「ご苦労さん。次はニンニクの皮むきだ。そこにあるニンニク全部むいてくれ。やり方は達樹教えてやれ」

達樹さんの手元を見ながら俺も見よう見まねで皮をむいていく。

「なかなかうまいな」

「手先は器用な方なんだ」

一時間かけてニンニクをむいた。手がニンニクくさい。

顔を上げると二人とも黙々と手を動かしている。

「ニンニクの皮むき終わりました」

「おう。だったら響お昼のまかないを作れるか？」

家ではチャーハンぐらいいしかつくったことなかったが、餃子じゃないものを食べるチャンス逃してなるものか。

「作ります」

「材料はその辺にあるもの使ってな。ごはんも炊けてるぞ」

「わかりました」

俺はあわててスマホでレシピを調べた。材料はキャベツ、ニンニク、豚肉……。どうしても餃子レシピが多い。どうしようか？ これはどうかな？ 豚と野菜の寄せ鍋。フライパンでもできるらしい。材料を切っただけだな。よしこれにしよう。

野菜を切って、フライパンに入れ、調味料もスマホのレシピに忠実に作ってみた。途中で味見をしていないが大丈夫だろうか？ 恐る恐るスープを一口飲んでみた。これは美味しい。ネットって凄いな。俺が作っても美味しく出来るとは。

「出来ました」

「よし！ 休憩だ」

俺はドキドキしながら、二人の反応を待った。

「なかなかうまいな。なあ達樹」

「美味しいですね」

これまで無愛想だった達樹さんが少し笑顔を見せた。俺は一安心して自分も食べ始めた。

三人で鍋をつついた後、おじさんが、

「これからは俺と達樹で餃子の餡を作って包む作業だから、響はお見舞いに行ってくれないか？」

「お見舞い？」

「うちの持って行ってもらいたい物があるんだ」

「何ですか」

「着替えと、うちの好きな商店街の紅丸屋の饅頭を一箱買って行ってくれ」

「わかりました。病院はどこですか？」

「その商店街を抜けてまっすぐ行くと右手に白い大きな建物が見える。白井病院だ。その整形外科病棟二階二〇一だ。名前は加奈子。加倉加奈子だ。これからアルバイトが行くって連絡しておくからよろしくな」

俺は店を出て、おじさんに言われたとおり紅丸屋へ向かい饅頭を買った。そして、奥さんの入院している白井病院

の部屋を訪ねた。扉を開けると、四人部屋の奥のベッドで少し年配の女性が本を読んでいた。今はその人しかこの部屋にはいないようだ。

「こんにちは。加倉加奈子さんですか？」

「ええ。あなたがアルバイトの響くん？」

「そうです。おじさんに頼まれて、これ着替えとお饅頭です」

「ありがとう。ここのお饅頭おいしいのよね。ちょっと一緒に食べていきなさいよ。悪いんだけどこれでお茶買ってきてくれる？」

「わかりました」

俺は一階の自販機に行きお茶を二本買った。ところで、おじさん夫婦に子どもはいないのだろうか。

「買ってきました」

「ありがとう」

ふと、窓辺に目をやると、三人で写っている写真が目に入った。

「この写真の子は息子さんですか？」

「はい」

奥さんの表情が曇った。まずいことを聞いてしまったのが。

「五年前、自転車で出かけている途中で左折するトラック

に巻き込まれて死んでしまったの。生きていれば今高校二年生ね。音楽がとも好きな子だったわ」

「そっだったんですか」

俺はその後なんと言ったらいかわからず饅頭を黙々と食べた。味はあまりわからなかった。

「あんまり引き留めると悪いわね。明日は餃子フェスティバルでしょ？ よろしくね」

「はい」

「きょうはありがとうね。さようなら」

「失礼します」

息子さんが亡くなっていたなんて、生きていれば俺と同じ年か。だからおじさん俺に息子さんの影を見て泊めてくれたのだろうか。餃子屋を継ぐ人もいなくなってしまったのか。寂しいだろうな。

店に帰ると餃子の餡と皮がだいぶ出来上がっていた。

「お帰り、ご苦労さん」

「ただいま戻りました」

「早速で悪いけど、これらを小分けして冷蔵庫にしまってくれ」

「了解です」

すべての仕事が終わったのは夜の九時だった。

「きょうは疲れたな。俺は適当に餃子食って寝るから、達樹と響はこのチケットで、そのファミレスで食ってきてくれ」

夕飯も餃子以外のものを食べられるとは、良かった。二人で、ファミレスに行き、ハンバーグ定食を二人分頼んだ。

「達樹さんは大学生なんですよね?」

「そうだよ」

「将来の夢とかもうあるんですか?」

「強いて言うならば小説家かな」

「すごいですね。俺なんて将来何になりたいかなんてわからないですよ」

「俺も高校生の時は夢なんてまだ無かったよ」

「じゃあなんで小説家になろう?と思ったんですか?」

「昔から本を読むのは好きだったんだけど、大学一年の時に読んだ『青い雲』っていう本に感動して、こんなにも人の心を揺さぶることができるなんてすばらしいと思った。それで、こんな本を俺も書きたいなと思ったのがきっかけなんだ」

『青い雲』? 聞いたことないけどそんなに面白いのだから。

うか。と考えているところへハンバーグ定食がきた。ファミレスなので、まあまあ味だった。

店を出て、達樹さんと別れ夜風にあたりながらぶらぶら歩いていると、自転車のベルが後ろから聞こえた。振り返ると、俺と同じぐらいの年の女の子が独り言を言いながら、抜かしていった。耳を澄ましてその独り言を聞いてみると、まるで誰かと会話をしているようだ。電話しているのか? でもたまに後ろを振り向きながら話しているみたいだ。ちょっと不思議な子だ。

店へ戻ると、おじさんはもう寝ているようだった。俺も明日に備えて風呂に入って寝ることにした。

翌朝、バタバタと動き回る音で目を覚ました。一階に降りると、おじさんと達樹さんが慌ただしく準備していた。

「おっ起きたか。今起こそう?と思ったところだ」

「おはようございます」

「餃子フェスティバルは九時からだぞ。急いでこれをトラックに積み込んでくれ」

フェス会場に行くと、数十店もの餃子屋が並んでいた。

「賑わってますねー」

「そりゃ一年に一度他県からも餃子を求めてたくさんの人

が来てくれる日だからな。気合も入るってもんだよ。それじゃ餃子焼き始めるぞー」

九時になった。いよいよフェスのスタートだ。入り口の方からどつと人が流れ込んできた。餃子だけを求めてこんなに人がくるものなのか。

「すごい人の数ですね」

「ほら、そんなこと言っていないで、焼き上がったものからパックに詰めていけ」

「はい。わかりました」

正午過ぎになると、だいが客足が落ち着いてきた。ここまでほぼ手を止めることなく売り続けたからへとへとだ。

「おまえら、順番に他の店の餃子食ってこい。俺の分も買ってきてくれ」

この人の餃子愛は半端ない。俺は、二、三件回ってみた。同じ宇都宮餃子と言っても店によってずいぶん味が違うものだ。

四時になり、餃子フェスティバルは幕を閉じた。

「響、俺と達樹は先に余った材料を持って、店に一度帰るからその間に後片付け進めておいてくれ」

「わかりました」

俺が後片付けをしていると、女の子が近づいてきた。

「もう終わりですか？」

「はい、すみません」

「残念」

と言ってその子はきびすを返し行ってしまった。今の子もしかして、昨日自転車に乗って独り言をぶつぶつ言っていた子じゃないか？ 餃子を食べに？ まあいいか。

それからおじさんと達樹さんが帰ってきたので、三人で残りの後片付けをした。結局終わったのは六時ぐら이었다。達樹さんと別れ、店へ戻ると今日は仕事をしなくていいと言われたのですぐに寝てしまった。

次の日のフェスも大盛況で終わった。その後は通常営業の店を手伝い瞬く間に約束の二週間が過ぎた。

「二週間お疲れさん」

「お世話になりました」

「もう家に帰る気になったかい？」

「いえ、もう少し北の方まで足を伸ばしてみようかと思っ
てます」

「そうか。でも親御さんには心配かけんなよ。ところで、響がここへ来たとき、俺がたった三日間で自衛隊を諦めて

餃子屋を継ぐことにした話をしただろう。あれ、実は家出中、夜になると俺のじいさんが夢枕に出てきて、餃子屋をついでくれと訴えるんだ。三日間連続で出てきたもんだから半分怖くなって継ぐことにしたんだよ」

「そうだったんですか。そんな不思議なこともあるんですね」

「残念ながら俺の跡継ぎはいないんだけどな」

「おばさんから聞きました。交通事故だったとか……」

「まあでも跡継ぎのことはいいんだ。俺が死ぬまでこの店をやり続けるからね」

「これから頑張って下さる」

その後おじさんと達樹さんに別れを告げ、店を出たら昨日の女の子が立っていた。

「もう、店やってますか？」

「昨日フェスに来てましたよね。昨日は餃子終わってますみません。店はまだ準備中で十一時半開店です」

「そうなんですか」

少女は後ろを振り返り、

「まだなんだって。あっちの公園で待ってよっか」

「え？」

今のは誰に話しかけたのだろうか。不思議に思っている、少女は公園に行き公園のベンチに座りフルートを取り出して吹き始めた。これはビートルズの曲だ。曲名はなんだっけな？ その子のことを不思議に思いつつ俺は自転車に乗って出発した。とりあえず北を目指す。五時間ぐらい走った時スーパー銭湯があるのが見えた。疲れたし汗を流していこう。ひとつ風呂浴びてさっぱりしたので、夕飯も食べることにした。丁度夕飯時でテーブルは結構うまっていた。俺は二人がけのテーブルに座りラーメンと餃子を注文しようとして、おっと餃子はいらないやと一人笑ってしまった。その時相席いいですか？ と店員に聞かれたので、別にいいですよと答えた。

向かいに座った人はサラリーマン風のおじさんだった。

同じくラーメンを注文した。

「このラーメンうめえな」

急に話しかけられてびっくりしていると、

「俺は出張で、福島に来たんだ。お兄ちゃんはどこから来た？」

「宇都宮からです」

「じいしてまたこんな遠いところまで来たんだい？」

「自転車旅行で北を目指しています。行き先決まってないんですけど、どこかいいところありますかね？」俺はちょっとだけ嘘をついた。家出のことは敢えて言わなくてもいいだろう。

「そりゃ秋田がいいよ。上北村の倉山温泉っていうのがあるんだよ。俺の実家がそこで温泉旅館やってるんだ」

「温泉旅館をやっているんですか？ いいですね。行ってみたいです」

「そうか。じゃあここに住所書いておくから行ってみて。宿の名前は霧浜旅館。俺からも連絡しておくよ。おっと自己紹介が遅れたね、俺は霧浜良介きりはりょうすけ。君はなんていうんだい？」

「杞川響です」

「響君か。二泊ぐらいするかい？」

「はい。二泊でお願いします」

「ところで、自転車で福島から秋田はちょっと厳しいよね。明日丁度山形で仕事があるから自転車ごと乗っけて行ってやるよ」

「何から何まですみません。助かります」

「ようやく目的地が決まったので、休憩室で仮眠をとるこ

とにした。

朝になり気持ちよく目が覚めた。今日から新しい旅の始まりだ。昨日の夜と同じ食堂で朝食を取り、銭湯出口で霧浜さんと合流し山形まで車で送ってもらった。その後は快適に自転車をこぎ進めていった。きょうは昨日と比べて涼しい。それから三時間、途中ほぼ休むことなくこいでいたのでさすがにお腹が空いてしまった。近くにあったファミレスで軽く食べまたこぎ始めた。そこからはノンストップでこいだのでなんとか日が暮れる前に秋田の上北村にたどり着いた。そして霧浜さんからもらったメモ用紙を片手に目的の霧浜旅館を探したが、村についてから三十分が経過してもいまだ旅館が見つからない。村の奥へ奥へと進んでいくと山道が現れた。山の反対側に旅館があるかもしれないので仕方なく自転車を押して登ることにした。見た感じあまり高い山ではなさそうだ。それに緩やかな傾斜なので案外登りやすい。しばらく景色を楽しみながら登っていたら急の上の方でわっという声が出て何か右の斜面をずり落ちてきた。近づいてみるとすり傷だらけになったおばあさんだ。

「だっ大丈夫ですか？」

「××～@～」

何を言っているかよく分からないがとにかく助けた方が良さそうだ。

「立てますか？」

おばあさんはヨロヨロしながら立ち上がった。俺はなんとかおばあさんをサドルに座らせハンドルを握ってもらいどっちに向かったらいいか訪ねた。

「△#○●¥」

と言つて上の方を指さしている。

「あつちですね」

俺は疲れた体にムチ打って指さした方向を目指してゆっくり自転車を押していった。何かおばあさんが言っていたが何をいつているのか相変わらずわからなかった。適当に相づちをうちながら三十分程歩いたところで、頂上に着き、向こう側に小さい温泉街が見えた。やっと下りだ。それから三十分最後の力を振り絞って山を下りた。振り返ってみると山と言つより丘ぐら이었다が、リュックを背負つておばあさんを乗せてだったので、本当に体力の限界だった。温泉街の入り口に趣ある旅館が現れた。おばあさんが自転車を降りよつとしてゐる。

「いじぶか」

おばあさんがうなずくので、俺はおばあさんを降ろし、おんぶして旅館の入り口へと向かった。

「すみませーん」

「はーい」

奥から女将が出てきて、おばあさんを見て悲鳴をあげた。「どうしたのお母さん！」

「×△○～！+*!・#&」

「えっ？ 散歩中に足を踏み外してこの人に助けてもらったの？」

「¥0=」

「本当にありがとうございます。どうぞお上がりになって。ちょっと静子しずこさん。おばあちゃんが大変なのよ。お医者さん呼ぶから静子さんはこの人にお茶出してあげて」

「はーい。あらあら大女将大変じゃないですか」

と言いつつ俺をロビー前のソファに案内してくれた。

「どうぞお座り下さい」

俺はお茶を飲みながらしばらく座っていた。その間にお医者さんがやってきて、その後全身包帯ぐるぐる巻になつたおばあさんが現れた。

「@¥・!#\$\$%&¥!#??\$!-」

「お母さんまだ歩いちゃ駄目よ」

「#-#\$#&?!!?&#-¥##\$\$¥」

俺がきょんとした顔をしてるよ、

「あ、お母さん秋田弁全開で喋ってもわからないわよ。ちなみにさっきはどろもありがとねと言ってるのよ」

「ええええ」

と俺が言うとおばあちゃんは少し微笑んで部屋へ戻っていった。

「ところで霧浜旅館ってどこにあるかご存じですか？」

「霧浜旅館はここだけ。もしかしてあなた杞川響くん？」

「はい。ここが霧浜旅館でしたか」

「息子から聞いているわ。お客様なのに、大変な思いさせちゃったわね。二泊とは言わず母を助けてもらったお礼に好きなだけ居ていいわよ。もちろんお代はいらないわ」

「本当ですか？ ありがとございます。でもそれでは心

苦しいので、何か手伝わせて下さい」

「ええ、でもきょろ明田さんゆっくって、明後日へ

らいらいからお願ひして下さるわ」

「わかりました」

「部屋に案内するわ」

部屋は山の景色がすばらしい開放的な和室だった。

「いい部屋ですね」

「ごゆっくり、大浴場と露天風呂は下の階の右手奥よ」

「じゃあさっそく入ってきます」

「夕飯は七時でいいかしら？」

「はい大丈夫です」

俺はまず家に「今秋田の上北村の倉山温泉、無事」とメールした。そして浴衣を持って大浴場へむかった。誰か一人入っているようだ。見たところ歳は三〇代後半といったところか。俺はシャワーで体を洗い流し、露天風呂へと向かった。暗いので景色はあまり見えないが、夜空には満天の星が広がり、身体の疲れがどんどん癒やされていくようだ。すると内風呂に入っていた男の人が露天風呂へと移ってきた。そして今にも消え入りそうな声で何か話しかけてきた。

「君一人で来たのかい？」

「はう」

「ええ、」

「十七です」

「若いね。人生悔いの無いように生きなよ」

「はあ」

その人はそう言った後黙ってずっと星壳を眺めていた。

俺は風呂を出て、夕飯を食べた後ロビーに行ってみた。そこには本棚があり、ご自由にお読み下さいと書いてある。久しぶりに本でも読もうかと思い上から順に見ていくと、まったく知らない作家たちの本ばかりだ。だが途中一つだけ聞いたことのある題名の本があった。『青い雲』どこで聞いたんだっけ。作者は『きょうか』となっている。『きょうか』なんて聞いたことないな。俺は青い雲を読み始めたが、ふと人の気配がして目を上げるとさっき風呂で会った人が出て行くのが見えた。こんな夜にどこへ行くのだろう？ 少し不安になったので、どこへ行くのか話しかけてみることにした。

「どこに行かれるんですか？」

「あっ君はさっきの……。ただの散歩だよ」

「そうですか。いらつらつしやう」

そうは言ったものの深刻そうな顔をして出て行ったので、やっぱり不安に思っていたら、丁度さっきの仲居さんが通りかかった。

「すみません」

「はい。なんでしょう」

「気のせいかもしれないんですけど、今男の人が出て行ってその人の顔がとても深刻そうだったので、もしかして自殺なんてことないかなって思ってた」

「本当ですか！ 近くに自殺の名所があるし、こちらへんはイノシシもでるからどちらにしても早く連れ戻した方がいいわ」

仲居さんは慌てて懐中電灯を取りに行った。そして俺は仲居さんと一緒に男の人の後を追いかけた。途中分かれ道にさしかかると、

「自殺の名所はこっちよ」

仲居さんを見つめて山道を必死に走った。すると遠くにはんやりと人の影が見えた。

「あの人じゃないですか？」

「きっとそうね。この先は崖よ。そこから飛び降りようとしているに違いないわ」

「急ぎましょー！」

男の人はトボトボと歩いているので何とか追いつけそうだった。

「お客様！ この辺はイノシシが出るので夜の一人歩きは

危ないですよー」

「えっ？」

男の人は立ち止まってゆっくりと振り向いた。俺と中居さんはハアハア肩で息を切りして男の人の前に立った。

「さあ、こんなところにいると危ないから宿に戻りましょう」

男の人は半分ほっとしたような顔をしてついでにきた。

宿に着くと、静子さんがロビーであったかいコーヒーを出してくれた。男の人は終始無言だったがコーヒーを飲むと落ち着いたようで部屋へと戻っていった。

「間に合ってよかったですね」

「そうよね。あの人も落ち着いたみたいだし。あら、『青い雲』読んでたの？」

「はい。どこかで聞いたことがある気がして」

「この本はね。私が別の旅館で働いていた時に、お客さんが書きためていたものなんだけど。そのお客さんと意気投合してその原稿を読ませてくれたことがあったのよ。そうしたら生き生きとした描写が面白いし、人情味にあふれているのよね。そんな風に言っていたらそのお客さんがその原稿を私にくれたのよ」

「どういことは世界に一冊の本なんですね」

「その原稿を元に私が製本して二冊作って一冊はここに、もう一冊はそのお客さんに送ったわ」

その瞬間俺は『青い雲』を読んだのは達樹さんだったということを思い出した。

「世界に二冊？ でも宇都宮で会った人が読んだって言ってたんですよ。この旅館に来たことがあるのかな？」

「そうかもしれないわね。ここで本を読んでいくお客様は結構いらっしやるから」

俺は『青い雲』を借りて部屋へ戻った。達樹さんにメールで聞いてみよう。俺は『青い雲』を霧浜旅館で見つけたことと、達樹さんも来たことがあるのかと聞いてみた。ふと時計を見るともう日をまたいでいた。俺は布団に入り、気づいたら寝てしまっていた。

翌朝、朝食を食べてからまた部屋に戻った。散歩してもいいが、この本の内容が気になるので読むことにした。達樹さんからの返信はまだない。しばらく集中して本を読んだ。この本は旅先での出来事を小説風にアレンジしたという感じだ。読み終わった後自分が体験したことかのようにワクワクした気分とすがすがしい気持ちが残った。途中宇

都宮の餃子屋の家出中の息子の話もできて、もしかしてその人が加倉さんだったら面白いのになと思った。そういえば達樹さんからの返事は来たかな？ メールを見てみると達樹さんから「俺も秋田の霧浜旅館行ったことある。そこで読んでんだよ。すげえ偶然だな」と返信が来ていた。俺はびっくりして、「本当にすごい偶然ですね。世の中狭いもんですね」と返した。

このことを仲居さんにも言ってみようと思い、探しに部屋を出た。下に降りたらロビーに居た。そういえばあの中居さん確か昨日女将さんが静子さんと呼んでたな。

「昨日話した宇都宮の人に聞いてみたら、確かにこの旅館に来てあの本を読んでいたみたいですよ」

「そうなの。こんな片田舎の旅館に知り合いが来るなんてね。不思議なものね」

「本当ですね。そういえば、昨日の人は大丈夫なんですか？」
「ええ。さっき遅めの朝食をとって、大浴場に行かれたみたいよ」

「そうなんですか」

静子さんと別れ、俺は個人的にあの人のことが気になったので、大浴場に行ってみることにした。露天風呂に入る

と夕べは暗くて見えていなかったきれいな山々の景色が広がっていた。

「きれいだね」

俺はおじさんが話しかけてきたので少し戸惑った。

「はう」

「昨日は追いかけてきてくれてありがとう。実は僕はあの崖から飛び降りて死のうとしていたんだ」

やはりそうだったか。

「どうしてまた」

「僕はオーケストラでフルートを演奏していたんだけど、半年前団長が新しい人になって、ことごとく目の敵にされたんだ。ずっと我慢して続けていたけど、とうとう大げんかしてクビになった。その団長は顔の広い人だから新しいところで雇ってもらうのも難しく、それでもう自暴自棄になって死んでしまおうと。僕には音楽しかなかったからね」

「それでしたか」

そしてしばらくの沈黙の後その人が風呂を出ようとした。しかし名前を聞くのを忘れていたことに気がついたので引き留めて名前を聞くと結石音広けいしおんひろと名乗った。

一方そのころ杞川家では響のメールを見た家族が旅行の計画を立てようとしていた。

「俺、どこかでその倉山温泉のこと聞いた気がするんだ。どこでだったけな」

「とにかく、もう夏休みに入ったし、歌も連れて三人で行きましょうよ。ねえ歌」

「ホント？ 私も温泉行きたい」

「じゃあ決定だな。早速予約しよう」

「何件くらい旅館があるのかしら？」

「旅館は三つしかないぞ。石井旅館、高野旅館、霧浜旅館……。霧浜？ そうだ！ 確か取引先の霧浜さんが実家が倉山温泉で旅館やってるって言ってたな。きっとこのことだ。霧浜さんに予約をお願いしてみよう」

「しばらくして霧浜さんからメールが届いた。」「ご予約ありがとうございます。ちょっと前に福島で出会った男の子にも旅館を紹介したのですが、杞川響くんという子でした。もしかして親戚の子ですか？ 杞川さんって珍しい苗字なので覚えていたんですよ」

「おい！ 霧浜さん福島で響と会ってたみたいだぞ。霧浜

旅館紹介してくれたって」

「じゃあ響は霧浜旅館にいるのね！」

「そういことだ。明日朝一で出発するから準備始めるぞ」

「歌は準備しないでいいから夏休みの宿題進めておきなさいよ」

「えー後でやるからいいよ。お兄ちゃんだけこんなに長い間旅行してずるいよ」

「いいから今やりなさい」

そんなことになっているとはつゆ知らず響は旅館の仕事を手伝い始めていた。

「響くん悪いけど洗濯と部屋の掃除を頼めるかしら？」

女将に言われたので静子さんに教えてもらいながら、仕事を進めていった。その後一段落したので休憩室で静子さんとお茶を飲んで一休みした。

「『青い雲』読みましたよ」

「どうだった？」

「旅の道中で出会った人の温かさや人生観から学ぶことがいろいろありました」

「そうよね。そうだ！ この本結石さんに勧めてみたらど

うかしら？」

「いいですね。あの人もこの本で元気ができるかもしれませ
んね」

その後夕暮れまで仕事が続いた。夕飯時になったので、
俺は食堂へ行った。すると結石さんが窓際の席に座っていた。

「こんばんは」

「あー響くんか」

「ぎょうは何やってたんですか？ 俺は洗濯や掃除でもう

へとへとですよ」

「バイトしてるの？ 大変だね。僕は散歩しながら今まで
の人生を振り返っていたんだ。思い返すと本業の傍ら子ど
も達に楽器を教えていた頃が一番楽しかったなあ」

「へー子ども達に」

「うん。宇都宮の公民館で小中学生を集めてフルートを教
えていたんだよ」

「宇都宮ですか」

「でも、五年前に辞めちゃったんだ」

「どうしてですか」

「その時の教え子の一人が交通事故で亡くなってしまっ
たんだ。その子はフルートに関してすごい才能を持っていた

し明るくて元気で皆の人気者だったんだよ。その子がいな
くなったのが原因なのかはわからないけどその時からみる
みるうちに生徒が減ってしまったんだ。中でもその子と
一番仲が良かった女の子はともショック受けたみたいで、
その後一人でいることが多かったな」

俺は不意に宇都宮で出会った少女を思い出した。そう言
えばあの子公園でフルート吹いていたな。しかも一人で居
るはずなのに誰かに話しかけていた。そして同時に加倉さ
んの息子さんのことも頭に浮かんだ。

「五年前っていうとその亡くなった子はまさか餃子屋さん
の子では？」

「えっ！ なんて知ってるの？」

「その子加倉っていう苗字ですか？」

「そうだよー」

「実はここに来る前宇都宮で偶然入った餃子屋さんが加倉
さんのところだったんです。俺家出中だったんで、事情話
したら二週間そこに居させてもらう代わりに餃子屋を手伝
うことになって。その時に息子さんの話も聞いて、音楽が
好きだったって」

「そうだったんだ。ところで君家出中なのかい？」

「ええまあ。あと、加倉さん家の近くで見かけたんですけど、やたら独り言が多い女の子で最後に見たときはフルートを吹いていた子がいたんですよ。だから結石さんの教え子かもしれないですね。年は俺と同じくらいかな」

「その子はもしかして羽衣石さんじゃないかな？ 加倉さん家の子と一番仲が良かった子だよ。あと独り言って誰かに話しかけているみたいじゃなかったかい？」

羽衣石？ 達樹さんと同じ苗字だ。もしかしたら達樹さんの妹かもしれない。

「そうでしたよ。後ろ振り向いて話しかけている感じでした」

「やっぱりそうか。あの子には加倉くんが視えているらしい。事故が起きた日からね、一週間ぐらいフルート教室に来なかったんだけど、一週間経ってその子が来ると事故のことなんか無かったみたいにもどおり明るいんだ。そして、一人で何かしゃべっていたからどうしたのか聞いてみたら、加倉くと話しているんだよと嬉しそうに答えたんだ。本当にいるのか僕にはわからないけど、羽衣石さんにとっては加倉くんはすぐそばにいて視えているというふうとなんだよ」

「そういうことでしたか。ところで、加倉さん家でバイトしている大学生、羽衣石達樹さんっていうんですけど、その子のお兄さんなのかな？」

「お兄さんがいるかどうかは知らないけど、羽衣石さんって珍しい苗字だからそうかもしれないね」

なんだかこの旅は偶然が多いな。そういえばうちの家族は今頃何やってんだろう。ふと下を見ると手に本を持っていたことに気がついた。

「あっ実は結石さんを探していたのはこの本を渡したかったからなんです」

『青い雲』聞じたことないな

「これ読むと元気がでていいですよ」

「ありがとう。読んでみるよ」

次の日、俺は窓掃除を頼まれていた。今日はお客さんが多いらしい。静子さんも慌ただしく働いている。あつという間にチェックインの時間になった。何人かのお客さんがまとまって来た。結石さんも降りてきた。

「きょうはお客さん多いね」

「そうですね。なかなか忙しくなりそうですよ」

「そうだ、この本読んだよ」

「どうでしたか？」

「君が言うとおりになんか元気が出ちゃったよ」

「それはよかったです」

そこへまたお客さんが到着した。

「あっお兄ちゃんだ」

「えっ？」

聞き覚えのある声だったので、入り口を見ると俺の顔を
見つめる三人の顔があった。

「げっ」

「響」

三人は口々に俺の名前を呼んで近づいて来た。

「父さん、母さん、歌……どうして」

「元気そうだな」と父。

母は女将や静子さんにお礼をいい頭を下げている。そして
結石さんにもお世話になりましたと言いかけて結石さん
の持っている本に目をとめた。

「あっ懐かしいわ、この本。でもなんでここにあるのかし
らっ？」

「読んだことあるの？ 母さん」

「ええ、読んだっていつか書いたのよ」

「えーっ」

と皆が驚いて母さんを見つめた。

「きょうかさんのね。二十年ぶりかしら？ 私のこと覚
えてる？」

「もしかして、福島の旅館で会った……」

「そう、仲居の静子です」

「こちらで働いていたなんて」

「まさかこんなところで再会するとはね」

「ってことは静子さんが言っていた人って母さんだったの
か」

「この本あなたが書いたんですか。とても感動しましたよ。
なんとというか生きる活力がわいてきた感じです」

「そう言ってもらえると嬉しいですよ」

「ところで、母さんなんできょうかかってペンネームなの？」

「それはね、この本の中にも出てくるんだけど、私が若い
頃旅をしていた時、公園で学生っぽい子がフルートを吹い
ていて、その音がまるでソプラノ歌手が歌っているように
響いてたのよ。それで響く歌できょうかというペンネーム
を思いついたってわけ。その名前を気に入っていたからあ
なたたちにも響く歌ってつけたのよ」

「へー響と歌って名前ってそつだったんだ。知らなかった」

「まっそれはともかく響話があるのよ」

「なに？」

「まあまあみなさん立ち話もなんなのでお部屋にご案内しませよ」

静子さんに促されて結石さんは戻り父さんと歌は静子さんに案内され部屋へ行き、母さんと俺は俺が泊まっている部屋に行った。部屋に入った後数分沈黙が続いたが、とうとう母さんが口を開いた。

「響、学校のことだけど、担任の先生に相談したら残りの夏休み補講を受けて、試験に受ければ進級できるって言うてくれたわよ」

「そっ」

「高校に戻る気はあるんでしょ？」

「うん。この旅でいろいろな人たちの生き方を見て俺も世の中に貢献して頑張っていきたいと思いはじめたよ」

「それは本当に良かったわ。じゃあここで一泊したら明日宇都宮に移動して、お世話になった餃子屋さんにお礼を言うに行きましょ」

「わかった」

夕飯の時間になったので、みんな食堂に集まった。結石さんが窓際の席に座っていたので、近くに座ることにした。

「結石さん、急なんですけど俺家族と一緒に明日帰ることになって、途中宇都宮に寄るのでここまで一緒に行きませんか？」

「それは助かる。実は死ぬつもりだったから帰りの分のお金用意してなくて」

次の日静子さんたちにお礼を言って父さんの車で宇都宮へ向かった。

宇都宮に着き、加倉さんの餃子屋を訪れた。一週間しかたつてないのに久しぶりな感じがした。

「加倉さん、響です」

「おう久しぶりだな。って一週間しか経ってないけどな。そちらはご家族の方かい？」

「どうも響がお世話になりました」

「いえいえ。こちらこそ二週間も手伝ってもらって助かりましたよ」

そこへ達樹さんがやってきた。後ろにはあの女の子が立っている。

「あっ結石先生？」

「おっ君は羽衣石さんだね？」

やはり達樹さんとこの子は兄弟だったか。俺は秋田へ行って出会った結石さんのことや、今まであった出来事を加倉さんと達樹さんに話した。二人はその話を驚きながら聞いていた。話を聞き終わった加倉さんが結石さんに向かって、「だったら、うちで働いてみないか？ 少ないけど給料は出せるし、そのお金を元にまた子どもたちにフルートを教える教室を開いたらいいんじゃないか？」

「本当ですか！ 是非働かせて下さい」

そして俺たちは加倉さんや結石さんたちと別れ、宇都宮から帰ってきた。俺はその後夏休みの補講を受けつつ猛勉強した。その甲斐あって三年生に進級でき、さらに希望する大学にも受かることができた。

そして高校最後の春休み、俺は久しぶりに母さんと加倉さんのところに行ってみることにした。餃子屋さんに近づいていくとどこからかフルートの音色が聞こえた。音のする方へ向かって行くと結石さんと何人かの子どもたちが楽しそうにフルートを吹いている。中には達樹さんの妹の姿もあった。

「お久しぶりです。結石さん」

「あー響くん久しぶり、お母さんもお久しぶりです」

「結石さんの演奏を少し聴いていてもいいですか？」

「もちろん」

結石さんがフルートを吹き始めるとそれまで賑わっていた子どもたちの声がおさまり、皆聴き入っていた。

「そうだった！ この音よ！ 私が昔聞いたフルートの音色は！」

「じゃあ、あの本に登場していたのは結石さんだったんだー！」

結石さんの演奏が終わり、母さんは興奮して結石さんの方へ近寄っていった。

「結石さんあなたの演奏だったのよ。私が若い頃聴いたソプラノ歌手の歌が響いているような演奏は！」

「そうでしたか。なんだか嬉しいなあ。これまで人の役に立ったことなんてないと思っていたのに」

「何を言っているんですか。私はもちろん子どもたちの顔を見て下さい。皆も笑顔になっていますよ」

結石さんはみんなの顔を見て涙ぐみながら言った。

「ありがとう」

子どもたちは楽しそうにまた演奏を始めた。

「響くん、今年の初めにホールで演奏会をやったんだよ。そしたらね、演奏が終わった後羽衣石さんはとてもすっきりした顔をしていた。その日から独り言はもう無くなっていたよ。きっと加倉くんもあの演奏会でみんなのフルートを聴いて満足したんじゃないかな」

「そうでしたか。羽衣石さんもみんなと一緒にもう寂しくないですもんね。結石さんこれからも自分の夢を諦めずにお互いががんばっていきましょう」

「そうだね。地に足つけてがんばるよ」

それから俺と母さんは加倉さんの餃子屋に向かった。ドアを開けると加倉夫婦と達樹さんの威勢のいい「いらっしゃい」という声にむかえられた。